

# 近代産業—重工業・農業

1890年代、日本の重工業は脆弱であった。そのため、日本は鉄鋼の国産化を目指した。1901年、八幡製鉄所が操業を開始し、清の大冶鉄山の鉄鉱石を原料に、鉄鋼を順調に生産した。当時、大陸の植民地が食料・肥料の供給地として比重を高めていたが、重工業の原料供給の面でも日本と大陸の関係は強まっていた。

## ○重工業

### ●財閥の登場と炭鉱開発

1884年、工場<sup>ほらいさ</sup> 払下げ概則の廃止で、官営事業払下げの条件が緩和された。

⇒官営事業は、軍事工場と鉄道を除き、次々と民間に売却された。



政府から特権を与えられた資本家「政商」は、次の優良鉱山の払下げを受け、その開発に機械を導入して、石炭・銅の輸出を増やした。

(1) \_\_\_\_\_ 銅山—政商(2) \_\_\_\_\_ / (3) \_\_\_\_\_ 炭鉱—政商(4) \_\_\_\_\_  
 高島炭鉱・佐渡金山・生野銀山—政商(5) \_\_\_\_\_

⇒政商は、鉱工業・金融・運輸・貿易などを多角的に経営し、「財閥」に成長した。

◇高島炭鉱…雑誌『日本人』が労働者の悲惨な実態を告発

◇財閥…経営形態は、同一財閥による多分野の産業の支配(6) \_\_\_\_\_



財閥の力が入り、筑豊炭田<sup>ちくほう</sup>は、日清戦争後に国内最大の産炭地となった。

◇筑豊炭田…名称は筑前国・豊前国に由来

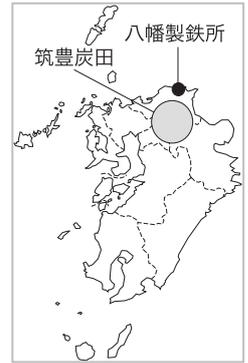


図1 筑豊炭田



図2 筑豊炭田の炭山  
\*図は香春岳

### ●造船業

官営の長崎造船所が(7) \_\_\_\_\_ に払下げられて、(8) \_\_\_\_\_ となり、政府の助成を受けつつ有力な民間造船所として発展した。



図3 戦艦「霧島」

### ●製鋼業—重工業の基礎

重工業は、民間では三菱長崎造船所などに限られ、材料の鉄鋼も輸入に頼った。

⇒軍備拡張のため、政府は重工業の基礎である「鉄鋼の国産化」を目指した。



(9) \_\_\_\_\_ 戦争後の1897年に、官営の(10) \_\_\_\_\_ が設立され、1901年、ドイツの技術を導入して操業を開始した。

→(10) は、筑豊炭田の石炭、清の(11) \_\_\_\_\_ 鉄山の鉄鉱石を利用した。

⇒(11) 鉄山の鉄鉱石は、清の製鉄会社漢冶萍<sup>かんやひょうコンス</sup> 会社に資金を貸与し(借款<sup>しゃつかん</sup>)、その見返りに安価で得た。



(12) \_\_\_\_\_ 戦争後、政府の保護の下に、民間の重工業も発達し始めた。

⇒民間の(13) \_\_\_\_\_ が設立され、日本最大の兵器製鋼会社となった。



図4 八幡製鉄所



図5 左：鉄鉱石/右：石炭

### ●鉄工業—機械を作る機械

1905年、池貝鉄工所は、先進国並みの精度をもつ旋盤<sup>せんばん</sup>を国産化した。

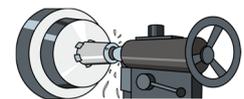


図6 旋盤

## ●電力事業

水力発電の本格化で、大都市では電灯が普及した。

## ○農業

### ●米作

工業に比べると、農業の発展はにぶく、依然として米の零細経営が多かった。  
⇒金肥の普及や、1896年設立の農事試験場による稲の品種改良で、  
土地当たりの収穫量は増加したが、人口の増加で米の供給は不足した。

年	10a当たりの年平均収穫量 (1883年=100)
1883	178kg (100)
1893	205kg (115)
1903	249kg (140)

図7 稲の収穫の変化

### ●貿易と養蚕

農家では自家用の衣料の生産が減少し、また、安価な輸入品に押され、  
綿・麻・菜種などの生産が衰退した。  
⇒一方、<sup>(14)</sup> \_\_\_\_\_ 輸出の増加で、桑の栽培や<sup>(15)</sup> \_\_\_\_\_ 業が盛んになった。  
◇(15) … 蚕<sup>かいこ</sup>を飼育し、繭<sup>まゆ</sup>を生産すること

年	日本
1891	2994トン
1905	4916トン
1909	8372トン

図8 生糸輸出量の変化

### ●地主の耕作離れ

1880年代の<sup>(16)</sup> \_\_\_\_\_ 財政でのデフレで、小作地の割合は増加し始めた。  
→1890年代も小作地は増え続け、零細農民が小作農へと転落していった。  
⇒大地主は耕作から離れ、小作料収入に依存する<sup>(17)</sup> \_\_\_\_\_ となった。

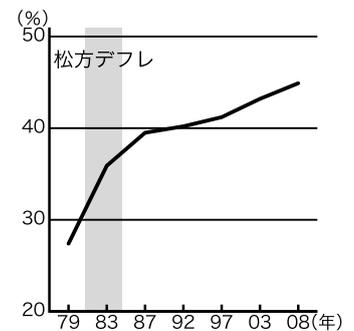


図9 小作地の増加

↓  
小作料は現物納、地租は定額金納であったため、米価の上昇で次の影響を与えた。  
地主：収入が増加しても、地租の負担は定額で増えず、企業設立や投資に挑戦  
小作農：地主から要求される小作料が増え、負担のみが増加を続け、  
副業や子女の工場への出稼ぎで家計を維持

↓  
日露戦争後、地租や間接税が増加し、農業生産停滞と農村困窮が問題になった。  
⇒政府は、1908年の<sup>(18)</sup> \_\_\_\_\_ を理念に<sup>(19)</sup> \_\_\_\_\_ を始め、  
協同事業に成功した村を模範とし、その事例を全国に紹介した。

年	小作料率 (%)
1885	63.0
1899	67.2
1905	70.1

図10 小作料の増加

## ○輸出入と貿易赤字

### ●日清戦争後の貿易収支

輸出では生糸・綿織物、輸入では原料綿花や軍需品・重工業資材が増加した。  
⇒貿易収支は、大幅な輸入超過（赤字）であった。

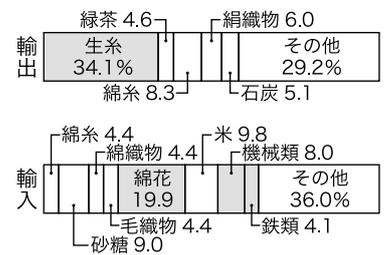


図11 1897年の貿易品目

### ●日露戦争後の植民地

日露戦争後、日本経済に占める植民地の役割は、次の点で大きくなった。  
対満州：綿織物輸出、大豆粕<sup>かす</sup>輸入  
対朝鮮：綿織物移出、米移入  
対台湾：米・原料糖の移入  
◇朝鮮・台湾は日本の植民地のため、輸出・輸入ではなく移出・移入

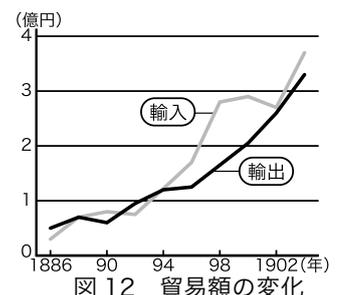


図12 貿易額の変化